

『かがやく都市』大池容子氏インタビュー

ジャンス・アルスラン

国際交流基金とビルケント大学演劇学科は、日・トルコ外交関係樹立 100 周年を記念し、劇団「うさぎストライプ」を主宰する劇作家・演出家の大池容子による『かがやく都市』共同制作を実施した。

大池は本事業のため、4 週間アンカラに滞在し、ビルケント大学演劇学科の学生・教員とともに『かがやく都市』上演のため稽古を行った。

両国のアーティストによる交流とその成果発表である上演を目的とした『かがやく都市』共同制作は 4 週間の稽古を経て、ビルケント大学内劇場にて、11 月 16、19、26 日、12 月 3、5 日に上演された。

上演後、劇作家・演出家である大池と『かがやく都市』についてインタビューを行った。

--『かがやく都市』は過去に日本で上演されたと伺っていますが、トルコで上演されたものと違いはありますか。

ご指摘のとおり、『かがやく都市』は 2022 年に日本で上演しました。今回はトルコでの試みとなります。今回と日本版との基本的な違いは、稽古を進めながら役者の意見を取り入れ、新しい要素を追加した点です。厳密に言えば、追加したというより、彼らの考えを取り入れたかったのです。そのため、今回の演出では少し違ったものになりました。

--そういった形で役者たちも制作に参加したのですね。

劇自体は大きく変わったとは言えません。ただ、劇のエネルギーは違います。例えば、日本版の掛け合いはもっと静かで、劇自体も静かでした。今回はもっと躍動的でエネルギッシュになりました。特に「謎の女」は日本版では静かな役柄でしたが、今回は激しい役柄となりました。この変化を私は面白く感じています。全て気に入っています。

--トルコの人々は地中海の人間なので、感情表現もより情熱的です。そのため、演技もそのようになるのでしょうか。特に日本の伝統芸能や一般的な演劇に対する認識との、ある意味大きな違いです。この違いが今回の制作に際してどのように影響しましたか。

私個人が考える大きな違いとしては、台詞回しが挙げられます。日本では台詞に忠実に演じていきますが、トルコではどちらかというと役者が言葉を足したり、アドリブを加えなが

ら演じることが好まれます。この点は少し、何というか、抵抗感がありました。しかし、稽古が進むにつれて、皆、自身の役をモノにしていって、アドリブも本筋から外れたものではなく、役の特徴に忠実になりました。なので、私も安心して彼らに委ねました。その他は、トルコの役者だからといった違いは感じませんでした。アンカラへ来る際、（今回は）特に学生なので、同じトレーニングや教育を受けていることから演技は似たり寄ったりなのではないかと思っていました。しかし、そうではありませんでした。各々の演技に個があり、強み・弱みがありました。それぞれの役者に個性がある点は、日本と大きく変わりません。皆が個性を生かして演技をしています。

--『かがやく都市』では（トルコで一般的な演劇スタイルとは）違った手法が用いられています。この点について少しご説明いただけますか。この手法では役者や劇そのものに対して何が求められていますか。

私は平田オリザという演出家・劇作家の下で演劇を学びました。（平田は）日常生活を自然な形で舞台化するスタイルを現代演劇において生み出した人物と言えます。（平田の手法は）会話が日常的で自然であることを重視します。例えば、普通は演者は観客に対し背を向けませんが、この手法ではそれができます。日常生活での振る舞いがあるがままに許容し、支持するスタイルの現代演劇です。一方、この日常的な会話の中には異質なテーマ、問題のあるテーマを含みます。例えば、離婚や死、あるいは戦争というテーマもあり得ます。目的は、観客の鑑賞後の認識に少し変化を与えること、自身の周りで会話する人々の背景にはもしかすると重要な何かがあるのかもしれないと思わせることです。『かがやく都市』を見ても分かる通り、私はこの手法を厳密には当てはめてはいません。しかし、この手法に影響を受けている部分はあります。平田の手法との違いの1つとして、例えば場面を複数に分けて同時に舞台上で見せるというやり方を採用しています。その他にもアンテナをつけた宇宙人を登場させているように、少し荒唐無稽さをちりばめ、ミステリアスな要素を入れています。

--こうした手法をふまえた宇宙人の兄妹の物語はとても興味深かったです。

厳密には表面上のことだけではなく、人々の頭の中の考えや感情にどういったものがあるのか、これらを反映させたいと考えていました。兄妹は宇宙人であると感じている、でもおそらくそうではない。結局は自分を異質な存在と感じていて、周りになじむことができない。表現したかったのはそういったものです。

--これまで舞台制作に際して、通訳をつけたことはありますか。通訳の技量も大池さんにとって（状況の）理解や役者との（意思疎通の）架け橋として重要だと考えます。この事業で

はどういった影響がありましたか。

過去にこうした形で制作したことはなかったです。通訳のおかげでこの劇は世に出せたと言えます。通訳のサポートはとても重要で、大きな影響がありました。役者がどの部分で（戯曲と）違う形で台詞回しや、動きをしたかを通訳はうまく取りもってくれたので、私の仕事は楽になりました。ある時を境に、私も役者がどの部分を変え、本筋からずれていないかどうかを理解しはじめてからは、稽古の進行も早くなったと言えます。

--お話どうもありがとうございました。

こちらこそありがとうございました。

ジャンス・アルスラン

1993 年、アンカラ生まれ。幼少期より、様々なジャンルの舞台で活動。中学時代に夢描いた演劇の道を選び、セルチュク大学ディレキ・サバンジュ国立コンセルバトワール演劇主専攻に進学。2014-2015 年シーズンより、コンヤ国立劇場にてプロとしての活動を開始。2015-2016 年シーズンより、アンカラ国立劇場で俳優として所属、現在に至る。国立劇場での活動と同時に複数の私立劇場、ドラマ、映画、アニメに俳優、助監督、コーディネーター、声優として出演・活動を続けている。